

一

次の1～5の――部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

- 1 トツキヨを取る
- 2 キソクを守る
- 3 病院にツトめる
- 4 暑さに閉口する
- 5 不易流行

二

次の問いに答えなさい。

問一 次の――部にあてはまる漢字をア～エから選び、記号で答えなさい。

野菜のコウ作用地を増やす

ア. 工 イ. 行 ウ. 耕 エ. 銅

問一 次の1、2のグループの中で、上下の二つのことばの関係が異なるものをそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。ことばの順序にも注意すること。

- 1 ア. 花木 — 紅梅 イ. 果実 — 黄桃^{とう} ウ. 鳥類 — 白鳥 エ. 季節 — 青春
- 2 ア. 楽器 — 鉄琴^{てん} イ. 歩行 — 運動 ウ. 天候^{てんこう} — 雨天 エ. 主食 — 米飯

問二 次の1、2の文の①～③について、正しい方をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- 1 ① (ア. 暖く ・ イ. 暖かく)、② (ア. 快い ・ イ. 快よい) 風が吹く中、
心はずませて家に③ (ア. 帰る ・ イ. 帰える)。
- 2 ① (ア. 幼い ・ イ. 幼ない) 妹が、② (ア. 自ら ・ イ. 自から) 部屋の窓を
③ (ア. 閉た ・ イ. 閉めた)。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

行儀作法。

①

ここで行儀作法の根本理念について、少し話しておきます。
基本は次の三つです。

- 1、人には敬意を払^{はら}う
2、物は大切に扱^{あつか}う
3、体の所作を整える

なかでも ② は、社会に出て環境が変わることで、学生のと看とは大きく変わるでしょう。人間関係の基本が変わるからです。

特に、会社では上下関係が学校以上に厳しくなります。上下関係^③しかない世界だとも考えてもよいでしょう。上下関係という会社の常識すら知らずに入社して、「上司に『これやって』と言われたから、私も上司に同じように『これやって』と言っ

た」なんてことをしたら……上司の不快指数は一〇〇を超えます。

作法の基本「人には敬意を払う」は、立場の上下関係によって、趣が異なります。

目上には敬意を

年下には寛容を

上司と自分とは平等ではありません。会社は技術や知識、経験をもって仕事をし、その対価としての利益を得るところですから、それなりの役職、年数を経験している人は、その会社であなたと同じ価値の存在ではありません。敬意の対象になる理由があるのです。役職の上下関係、経験年数の上下関係などが価値基準となり、その人の立場を決定するのです。それを受け止め、上司に敬意を持って接する新入社員は、行動や言葉にも自ずと違いが出てきます。

逆に、上司は部下に「寛容」の心で接します。ですが、これは単なる優しさではありません。寛い心で指導するのですが、同時に、命じられた職務をこなせる強い心も育てようとしているのです。ある意味、武士道に通じる心構えです。先輩や上司は、あなたに厳しくもしますが、立派に仕事ができる人材になってほしいと、待ってくれてもいるのです。上司の命には、寛容の一つ、「待ちの心」があると理解し、一日も早く一人前に仕事ができるように努めることが、あなたの会社人生を快適にする礎なのです。

昔は、学校を出たら即戦力として活動できるように、学校で行儀作法をきちんと教えてくれました。上司への接し方、挨拶の仕方、名刺の渡し方、お茶の飲み方、正式なディナーでの食べ方……。全部教科書に書かれていました。

さらに、行動の取り方だけでなく、心を込めて行いなさいと「心行一致」を教えられました。

⑦ が整っていなかったら無礼になり、⑧ が整っても⑨ が無ければ虚礼。どちらも失礼なことで教えられました。心も無く行動も乱れているのは「禽獣に近し」(鳥やけものレベル)と軽蔑され、心を込めて行動も整った形

にすることが行儀作法の最も大切な姿とされていました。

しかし、今の学校は、あまり行儀作法を教えてくれません。どういう行儀作法があるのかも教えませんし、一つひとつを実際にやって体験的に学ばせることもほとんどしません。当然、相手を思いやる敬意の心、寛容の心、慎みの心は育ちません。そのため、自分勝手、わがままな心で行動する「社会人」が増えてしまったのです。

行儀作法を学ぶということは、同時に、社会生活を送っていくために必要な心を学ぶことです。会社に入ったら、初日から少しでも仕事を覚え、一日も早く戦力となれるよう心がけることが大切です。後輩が入ってきたら、早く一人前の仕事ができるよう、育ててやることが大切です。

行儀作法の形を学び、心を磨くことは、こうした社会人生活をそのスタートから円滑に行うために必要不可欠な学習なのです。

⑩、行儀作法には、思わぬ落とし穴があります。⑪「高慢」です。一つ行儀作法を覚え、それが行えるようになると、そうしない人がダメ人間に思えてきます。きちんとやった自分が偉く思え、そうでない人をバカにするような気持ちになってきます。高慢な心です。

行儀作法は、人を見下げる心を育てるために形づくられたものではありません。これは全く逆の道です。しかし、このような落とし穴に容易に落ちてしまうのが現代の姿なのです。小さいときから行儀作法を身に付けてこなかったからです。あなたも、いつかどこかで、こういう落とし穴に落ちるかもしれません。しかし、落ちたたと気がついたときから、本当の行儀作法ができるようになります。人に優しい心は、自分の心が高慢にならないように、慎むことだと感じ取れるようになります。昔は、このことを「忍」とも言っていました。心の上に刃を置くのです。自分の心を名刀の刃のようにねばり強く鍛え、高ぶらない心を作り上げるのです。落とし穴に気がいたら、あなたは立派な心得のある人に近づくことができます。

また、行儀作法の学びには二つの段階があります。

- 1、^{しつけ}躰
- 2、^{たしな}嗜み

⑫ のが、「躰」です。漢字を見ればわかるように、自分の身（姿形）を美しくするのが、躰なのです。立ち方・座り方・着こなし・歩き方・物の渡し方・受け答えなど、親や先生、先輩・上司はそれなりに教えてくれます。教わったとおりしてみるだけで、あなたの所作は社会人として美しく整った雰囲気^{ふんいき}となります。これが「躰」です。

⑬ 「躰」ていただいたことをその通りに実践^{じっせん}していると、次第にそれが気持ちの良いことだと思えるようになってきます。これが「嗜み」です。「嗜む」は、「たしなむ」と読みますが、別に「このむ」とも読みます。漢字の右半分には「老」と「旨」^しが見えます。

長い年月をかけて熟成したうまみのある物を口にすれば、うまいと感じ、好んで食べたいと思うでしょう。

同様に、行儀作法も長い年月をかけて作り上げられてきたものです。それを受け継ぎ^{つぎ}行うことで、周囲の人だけでなく、自分も「気持ちが良い」と感じ、好んで行いたくなります。これが「嗜む」ということです。

社会人としての行儀作法を嗜み、その上に、あなたのバイタリティある個性を発揮しながら、良い人生を歩んでほしいと願います。

（横山 駿也『行儀作法の教科書』一部改編）

* 武士道……日本の武士階級に発達した道徳。

* バイタリティ……いきいきとした生命力。

問一

① には次の四つの段落が入ります。正しい順序になるように並べかえ、記号で答えなさい。

ア. 周囲の人を不快にしないこと。これこそが最も根本的な人への思いやりであり、行儀作法の基本なのです。

イ. ちよつと、古めかしいと感じるかもしれませんが、実際の所、私たちは日常的に行儀作法の中で快適に生活をしているのです。

ウ. もし、当たり前前^{けいたい}のことを当たり前前にしない人がいたら……電車の中での携帯電話、レジで並ばない、病院で大声で話す……こんなことをする人がいたら、周りの人は、「迷惑^{めいわく}だな」「静かにしてよ」と、不快な気分になります。

エ. 病院では歩く、電車の中では携帯電話で話さない、スーパーのレジは順番に並ぶ……。どれもこれも、当たり前前のことです。当たり前前^{けいたい}のことを当たり前前^{けいたい}に行うことが快適生活の基となる行儀作法なのです。

問二

② には直前の三つの基本のどれかが入ります。見出しの番号を答えなさい。

問三 ③ 「上下関係しかない世界だと考えてもよいでしょう」とありますが、どうして会社は上下関係しかない世界であると考えられるのですか。その理由を説明しなさい。

問四

④ 「自ずと」の意味として適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 自分から イ. なんとなく ウ. ひとりで エ. 意識的に

問五 ⑤『寛容』の心」とありますが、本文でこれにあてはまらないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 寛い心 イ. 強い心 ウ. 厳しい心 エ. 待ちの心

問六 ⑥ ⑨ のそれぞれにあてはまることばとして適当なものを本文からぬき出しなさい。

問七 ⑩ にあてはまることばとして適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. そのうえ イ. たとえば ウ. ところが エ. あるいは

問八 ⑪『高慢』とありますが、どうして現代人はこのようになってしまっているのですか。その理由にあたる部分を本文から二十五字以内でぬき出しなさい。(、や。や「」は一字とする。)

問九 ⑫ にあてはまる表現として適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 教えられても自分の思うとおりにやる イ. 教えられてその通りにやってみる
ウ. 教えられる前に自分が見て学ぶ エ. 教えられる以前に身についている

問十 ⑬「所作」とありますが、「作」の読み方として違^{ちが}うものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 作用 イ. 作柄^{がら} ウ. 動作 エ. 作動

問十一 ⑭「いただいた」という敬語と同じ種類のものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 先生のご意見をうかがった。 イ. 先生がこちらへいらっしゃった。
ウ. 先生が給食をめしあがった。 エ. 先生がおみやげをくださった。

問十二 本文の内容に合うものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 行儀作法は元来家族という集団の中で身に付けられるものであるが、家庭環境の変化によって行儀作法は学校で学ぶものになった。
イ. 行儀作法の学びは社会生活を送るための学びにつながっており、社会人としての生活を送るうえで必要不可欠なものである。
ウ. 行儀作法を学ぶことで高慢な態度をとってしまうことがあるが、これは対人関係の希薄さによるところが大きいと考えられている。
エ. 会社では上下関係が学校以上に厳しくなるが、これは社会という場所が厳しくなければならないという考えをもっているからである。

四

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「奥田！ 奥田！ どこを見ているんだ」

森勉もりべんの声が飛んできたのは「交響的譚詩」を通して二回練習した時だった。昨日まで克久かつひさは名指しでは何も言われたことはなかった。ベンちゃんの声は、怒鳴り声になることはなかったが、太くてしっかりした声だ。名指しで声をかけられただけでも、どきりとするのに、「奥田！」と来た時に窓の外がぴかりと光った。稲光いなびかりである。

「指揮を見る。指揮をしつかり見ろ。お前だけどんどん先に刻んじやっているんだ」

どうも 雷かみなり雲はまだ遠くにいるらしい。

「いいか、指揮をしつかり見るんだ」

と森勉が念を押して、克久が「はい」と返事をしたとたんにどしゃんごろごろときた。どうも、克久にとって今週はどつきり週間である。「はい」と返事をしたつもりが、雷の音にかき消されてしまった。外は一面の白い雨になった。

そんなことにおかまいなく、たぶん槍やりが降ろうが、赤い雪が降ろうが、練習は続くのである。森勉は「それじゃあ」何番からと、総譜スコアにふられた通し番号で、フレーズの始まりを指示する。全員が「はい」と答えた。新入生として入部してから一度も「はい」と返事をしろと言われたことはない。全員が「はい」と答えるのだから、誰か口をつぐんでいても一人くらいなら解りわかはしない。それなのに練習に熱が入ってくると、この「はい」という返事に張りが出てくる。鼻歌まじりに廊下ろうかを歩いている校長まで、「一緒に返事をしたくなる」「はい」の声だ。

「奥田！ オクダア！ それに祥子！」

進行しはじめたフレーズがぴつたりと止まった。鼻歌まじりに廊下を歩いていた校長は「はい」の声につられて返事をしたついでに音楽室から聞こえて来る演奏に聞き入っていたのだが、いいところではぐらかされてしまい、少しだけがっ

かりした。がっかりしたかわりに自分が何の用事で夏休みの学校に来たのかは思い出した。もちろん、ブラスのメンバーは廊下の聴衆ちようしゆのことなどは知らなかった。

祥子は「あたし、指揮は見てたよ」と隣りの克久にしか聞こえない声で言った。克久も指揮は穴のあくほど見ていた。

「あのな、このパーカスの入りのところだけど」

森勉がパーカスが入る三小節ほど手前から歌ってみせた。

「ここで、息を吸え！ タンタンタアン、はい！ やってみて！」

息を吸え？

祥子と克久は顔を見合わせた。

はて面妖めんような。面妖なんて単語はすぐに頭に浮かばない二人でも、面妖な顔はできる。

「やってみて、トンと入る前に息を吸って」

森勉がフレーズを歌う。真っ直ぐに立った克久と祥子は、彼の指揮棒がパーカスの侵入を指示する一拍手前で、ふうつと息を吸い込んだ。いや、吸い込んだのは祥子で、克久は何故か吐き出してしまった。

「奥田、君、息を吐いていない？」

誰かのかみ殺した笑いがほんの少量だけ克久の耳にも聞こえた。言われてみれば、なんだか吐いた気もする。克久は自分が息を吸ったんだか吐いたのだから解らず、怪訝けげんな面持ちだ。

「もう一回やってみようね。一拍手前で息を吸うんだよ」

森勉がまた歌い出す。メンバーの左手後方でスティックを手にした祥子と克久は、指揮棒の指示が出る瞬間を待ちながら、ふうと息を吸い込んだ。まるで池の金魚である。

「いいよ、いい。息を吸うんだよ。それで、息を吸ったら、次は吐いてね。祥子」

祥子は息を吸うには吸っていたのだが、口を大きく開けて息を吸い込んだ後で、呼吸をすっかり止めていた。今度は忍び笑いではなく、屈託のない笑い声がもれた。祥子自身も照れ臭そうに笑った。

克久や祥子でなくとも「息を吸え」という指示は、④ と思うに違いない。実は打楽器以外のパートのメンバーは、金管も木管も演奏の中に自分が侵入するときは無意識のうちに息を吸い込んで準備をしている。管楽器はそれなくては楽器が吹けないからだ。しかし打楽器は別段、息を吸い込んでおく必要はない。

楽器の演奏そのものに息を吸い込む必要がないばかりか、タイミングをとってしつかり音を出そうという緊張のあまり、息を止めてしまうこともあり得た。息を止めていても、打楽器の音を出すことには支障はないが、文字通り、この場合は「息が合わない」ということになる。特に「交響的譚詩」のように複雑極まりない不協和音が相互に響き合いながら、厚みのある音のまとまりを形づくっていく場合は、管楽器と打楽器の乖離は致命的な欠陥をもたらす。

「最初の頭のところ、トランペット、あまり無理にがんばらなくていいから。音を大きくしようとしなくていい。じゃ、頭から」

タララララと高い音から主題の旋律をかなでたあと、一斉に各々のパートが加わる手前で、ティンパニが低く響き、トランペットが不安気にうたう。大きく崩れようとする海のうねりが突然、眼前に広がるような始まりだ。

要するになかなかシリアスな曲だった。

下手をすると、ぐしゃぐしゃと不協和音がわけも解らずに響き続けるという、とんでもない曲だった。で、そういう難しくシリアスな曲が作り出す大きな音の渦巻きの中で指揮者を注視している克久と祥子は、池の金魚よろしく、ぱっくり大きく口を開けるのである。意識して息を吸い込もうとすると、口は開くものの、息は吸い込めない。音の渦巻きの中では、余計に息を吸うのが難しくなった。

「まだ、音になってないなあ」

森勉が吐息をついた。戸外の雨はもう止んでいて、雷鳴は遠く去った。

「もう一回だけ、通して、それで終わるから。他の人と音を合わせて。ピッチを合わせれば、無理に大きな音を出さなくていいから」

ある時、海面が盛り上がったかと思つたとたん、頂上が大きく崩れて白い波頭ができる。この大津波がぐいぐいと陸地へ押し出す。克久が耳を澄ます。克久ではなくて、克久の胸に棲みついてしまったうさが耳をぴんと立てた。滑らかな海面、それも夜の海が音もなく盛り上がる。巨大な波が姿を現す場面が見えた瞬間、克久はこれまで一度も経験したことがない勇猛果敢な気持ち覚えた。見えないものに挑みかかろうとする集中力が彼の気力を充実させた。それで、いや、それでもと言ったほうがいいのか、克久と祥子はぱくりと口を開けて、音の激しい渦巻きの中に飛び込んでいく。

※

息を吸えというのは今まで要求されたなかでも、けっこう実行しにくい要求だった。地区大会三日前になっても、二人はぱくりと口を開いていた。二人を見て大笑したのは、手伝いに来ていた打楽器パートのOBだった。

「ちよつと、その二人、来てごらん」

君たちはこんなふうには息を吸っているんだ。OBはぱつと口を開けて見せた。

「口を開けたって、空気は入ってこないよ。まず息を吐いて、もつと吐いて」

克久と祥子は神妙に息を吐き出している。

「もつと吐いて。ほら、ちゃんと息が吸えるじゃないか」

そりゃ、そうだ。息を全部、吐き出してしまえば、あとは吸うしかない。

「まず息を吐くの。それから吸えば、自然に息を吸えるよ」

克久も祥子もにやりと笑った。吐くだけで吸わなかったら、目を回してしまう。

「ね、花火したいな」

「花火、いいねえ」

二人が息をしているうしろで、こんな会話をしているのは谷崎弓子と山村正男だ。なんだか二人はもう大会が終わった時のことを考えている。

「プールに行きたァーイ、こう暑くちや、泳ぐしかないでしょ」

これはクラリネットの黒田さん。

「まったく、ぜんぜん、音になつてないのに気が早いんだよ」

トランペットのパートに集まつて喋る一年生に宗田がそう言つて笑つていた。壁には大会の日程が張り出されている。

地区大会	8月7日
県大会	8月10日
関東大会	9月8日
全国大会	11月17日
部長連	

こんなふうに。

「だから！」

有木がオーボエの鈴木さんにまた迫られている。

「だから、何？」

「真剣さが足りないのよ」

「そうだろうね」

「有木君、のんき過ぎやしない。三日後は大会なのよ。そりゃシードだから、上には上がれるけど」
「そうだな」

「こんな演奏じゃ、シード校として恥ずかしいって、昨日もセクション練習のあと、言ったの」
「そうしたら、少しは解つてもらえた」

「（1）いるのは（2）いるよ」

「だったら、いいじゃないの」

「（1）いるのは（2）いるの。一年坊主は、あ、（3）いるなつて顔をしてるから。でも、何を（4）いるのかぜんぜん（5）ないの。有木君、あたしの言つてること解る？」

「ぜんぜん解らないって」

有木は苦笑いしながら、俺だつてあせているんだよという言葉をもみ込んだ。音楽室の隅ではフルートの田中がパトリリーダーの嬉賀さんと話し込んでいた。「ウレシガ」という変わった名字だけど、ちつともうれしそうではなかった。休憩時間はこんなふうになつていた。

「怒つてるといふ顔はするの。何を怒っているのか、もう少し頭を使つて考えてちょうだい！」

オーボエの鈴木が有木に言っている苦情は昔風に言えば、
⑤に腕押し、つまり怒りの空振りということになる。

「怒っているのは見れば解るよ」

「見れば解るですって！ あたしの顔、そんなに怖い？」

「ち、違います。顔が怖いんじゃないってさ。だから……」

怒りの空振りに苛立っている鈴木が、相変わらざるにくりくりの有木を相手にしているのだから、らちがあくはずがない。

「明日さ、市民ホールで練習すれば、また違ってくるよ」

「一日でどうにかなると思ってるの！ 一日でどうにかなるのだったら、なんで、こんなに毎日、毎日、練習しているのよ」

「俺に怒るな。俺を怒ってもしょうがないじゃないか」

鈴木女史のボルテージがこれ以上、上がったら、さすがの有木君も太刀打ちできない。扉が開いたのはその時で、森勉が音楽室へ入って来た。今までの賑やかさがうそのように静まりかえった。席についた有木の顔から笑いが消えた。彼は「交響的譚詩」のアタマの部分のソロを担当していた。楽譜にすれば数小節に過ぎないが、最初の音を自分一人ですすうのは恐ろしい。

「では、交響的譚詩を」

森勉がそう言うってから、指揮棒が振り上げられるまでの間、空気が固く張り詰めた。ここ数日は各パートのOBも入れ代わり立ち代わりで顔を見せているが、彼らも固唾をのむ。様子だけが一生懸命に息を吐き出していた。それだって、視線は森勉の握る指揮棒の先端から外れることはない。射すような視線が森勉に集まる。単純な意味での真剣さで言えばプロの演奏家よりも鋭い百の視線が、一本にまとまるのを森勉は待つ。こんなに張り詰めた空気の中へ、有木はたった一本のクラリネットで割って入るのだ。

最初の音から、音は少しずつ上昇していき、それからちよつと、下がる。下がってきたクラリネットを待ち受けて、ティンパニが連打され、銅鑼が深々と打ち鳴らされ、金管楽器たちが高らかに歌い始める。この滑り出しがきれいに決まるかどうかで、以後の進行状態も変わってくる。

(中沢けい『楽隊のうさぎ』一部改編)

*交響的譚詩……吹奏楽の曲。克久たちがコンクールに向けて練習している。

*パーカス……パーカッション。打楽器のパートを担当する人。

*乖離……結びつきがはなれること。

*シリアス……きわめてまじめ。本格的。

*ピッチ……速さ。ペース。

*OB……卒業生。

*シード……強いチームを想定し、前もって選出すること。

*ボルテージ……情熱。熱気。

問一 部 a ～ d の中で、表現上の工夫が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問二 ①「練習に熱が入ってくると、この『はい』という返事に張りが出てくる」とありますが、その理由として適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 「はい」という返事をするのが、団結のしるしだから。
- イ. 「はい」と返事をしないと、怒られるかもしれないから。
- ウ. 「はい」という返事に、全員の緊張感が表れてくるから。
- エ. 「はい」と返事が自然にそろうことが、喜びになるから。

問三 ②「がっかりした」のはなぜですか。適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 注意されてばかりの演奏をするメンバーに失望してしまったから。
- イ. せっかく演奏を楽しんでいたのに、曲が止まってしまったから。
- ウ. 鼻歌でメロディを歌える喜びが中断されてしまったから。
- エ. 曲の盛り上がる一番いい部分が聞けなくなってしまったから。

問四 ③「息を吸え！」とありますが、この指示の目的は何ですか。目的とは違うものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 祥子と克久の二人だけが、息を合わせて演奏に入れるようにするため。
- イ. 管楽器と打楽器の演奏が合わず、演奏全体に欠陥が生じることを防ぐため。
- ウ. しっかり音を出そうという緊張のあまり、息を止めてしまうことを防ぐため。
- エ. 金管や木管と同じように息を吸い込むことで、タイミングを合わせるため。

問五 ④ にあてはまる三字のことを、本文のここより前からぬき出しなさい。

問六 「※」までの部分で、緊迫した練習時間が過ぎ去ったことが分かる表現を一文でぬき出し、はじめの五字を書きなさい。

問七 「※」より後の部分は、いつのできごとですか。日付を漢数字で答えなさい。

問八

(1) (5) には、I「解^{わか}って」、II「怒^{おど}って」のどちらかがあてはまります。その組み合わせとして適当なもの^{もの}を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア.	I	—	II	—	I	—	I	—	II
イ.	I	—	II	—	II	—	I	—	I
ウ.	II	—	I	—	I	—	II	—	I
エ.	II	—	I	—	II	—	II	—	I

問九

⑤ 「に腕押し」がことわざになるように にあてはまることばを書きなさい。また、それと同じ意味を持つことわざを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 立て板に水
- イ. 豆腐^{とうふ}にかすがい
- ウ. 猫^{ねこ}に小判
- エ. 焼け石に水

問十

⑥ 「席^{せき}についた有木の顔から笑いが消えた」のはどうしてですか。その理由として適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 音楽室へ入ってきた森勉の表情にただならぬものを感じ、笑っている場合ではなくなったから。
- イ. まわりのみんなが静まりかえって、その場の空気がこおりついていると感じ不安になったから。
- ウ. ここ数日練習がうまく進んでいなかったため、今から演奏する曲にプレッシャーを感じたから。
- エ. いよいよ練習が始まると思うと、自分の担当するソロの部分の緊張感でいっぱいになったから。

問十一

⑦ 「様子だけが一生懸命に息を吐き出していた」とありますが、だからどんなアドバイスを受けたからですか。その理由を説明しなさい。

(国語問題終わり)

(A日程 二月一日午前実施)